

《書評》

中西泰之著『人口学と経済学
—トーマス・ロバート・マルサス—』

(日本経済評論社, 1997, A 5 判, 231p.)

石 南 國

マルサスの『人口論』初版が1798年に出版されて200年を迎えようとするとき、本書が出版された。マルサスの『人口論』および『政治経済学原理』の両著およびその周辺諸文献を渉猟し、解釈学的詮索のなかで、マルサスの人口学と経済学との関連性および一体性をめぐる諸問題を提示している。近年では稀にみる、ここ10年間に発表した著者の研究成果の論文集である。著者は、マルサスが『人口論』初版で提示した、人口原理は人口の惰性的増減運動 (momentum) で現われる人口波動の理論であるとする。そして著者は、これを基本に「人口学」が、第2版の大改訂を経て第6版までの後続改訂版と『政治経済学原理』などで、経済学と深くかかわり、「有効需要理論」を展開し、「経済人口学」へと形成される過程を明示する。その論証の過程で、著者は経済史学の立場での緻密な解釈的詮索のうちに成果をあげているようであるが、その詮索的論述は学会に大きな波紋を投げかけるものとして興味津々である。

まず、第1編の「マルサスの人口学」で、著者は戦前の南亮三郎と吉田秀夫の研究成果を受け継ぐと同時に発展させることを目的として議論を展開するが、批判に終始し研究成果の受け継いだ部分は見えない。南と吉田論争をどう見、どう受け継ぎ発展させているかに大きな関心をもっていたが、どうやら両者に対する批判で終わっているようである。

第1章の「人口原理と人口波動」で、南はマルクスのなかにマルサスを見いだすことから「人口論史」を把握し、独自のマルサス解釈を導きだし、マルサスの「人口の原理」は「増殖原理」であり、マルサスの人口理論の本体は「人口波動の理論」であるとするが、著者はこれを「変質したマルサス人口理論」であるとする。「増殖原理」はマルサスのうちに歴史社会を動かす原動力としての人口を、つまり「人口史観」からきたものだとし、著者はこれを否定する。この「変質したマルサス人口理論」は南理論として認めることなのだろうか。南はマルサスの「増殖原理」の強さとこれに対応する「規制原理」との交互作用から来る人口の進転・逆転の連続反復運動の形をとって「人口波動 (oscillation) の理論」があらわれるとした。著者のいう 'oscillation' とどうちがうのだろうか。南はマルサスの「人口原理」を上記の意味の「人口波動理論」へと発展させたのである。「人口史観」は南の終生の研究課題であった。

第2章の「自然的人口論から社会的人口原理へ」では、吉田はマルサスが「生物的人口原理」を立てたものとして、この「自然的人口原理」をそのまま社会に適用して「社会的人口原理」へ飛躍させたとしている。

第2編の「人口波動と経済学」で、著者はマルサスの「人口学」の「経済人口学」としての側面を「人口波動論」から分析して、「人口学」と「経済学」とが「人口波動論」を介して結合しているとする。「(日本?)人口学会での通説的見解は人口波動論を内在的に研究した帰結ではなく、賛成しがたい」とする。敢て経済史学会の立場を意識してのことだろうか。

第3章の「人口波動と経済分析」で、初版に見いだされる人口波動論の意義と構造を分析して、南流の人口波動論の解釈は妥当であろうかと批判する。そして「人口波動論」は経済学の領域(経済循環論、有効需要論など)とかかかわっているのに、南とその後継者たちは人口論の領域にとどまって経済学の領域にまでいたっていないとする。これに対して一言する必要はないが、敢ていうならば、「経済人口学」の領域で総合科学としての地位を確固たるものになっているのはその後継者の業績によるものである。

第4章の「人口波動と政策思想」で、「人口波動論」が、南説、吉田説いずれとも違い『人口論』と『経済学原理』との連結環として考察されうるとする。そしてこれがマルサスの経済政策論とも関連するとする。

第5章の「『人口論』と『経済学原理』」で、『人口論』と『経済学原理』は一貫し、二人のマルサスはおらず、マルサス人口理論は静態的ではなく、動態的であり、経済的人口理論であるとする。ケインズは両著がそれぞれ過剰人口の悪魔Pと失業の悪魔Uに支配されるとするが、『経済学原理』の世界はこれら両悪魔UとPとが、ともに下層階級の困窮を強めている世界であるとして、ケインズとは異なる主張をする。そしてマルサス理論体系は、「人口波動論」に表現され、「有効需要理論」をも包摂する体系であるとする。「二人のマルサス」の問題性については、これで決着はつかないのではないだろうか。マルサス理論の成長過程では、あるいはそうであるかも知れない。

第3編の「マルサスの経済学」には、第6章の「初期マルサスの有効需要」、第7章の「中期マルサスにおける価格と産出量」、第8章「後期マルサスと価格・利潤・産出」および第9章「マルサスの経済学と貨幣」の4つの論文が用意されている。マルサスにおける人口学から有効需要論の成立に至る経路を克明に検討・解明し、有効需要の理論がマルサス人口論の初版のうちに懐胎されていて、後の『経済学原理』で結実したとする。マルサスにおいて「有効需要論」を再発見したケインズを「一流の時論家」としてしか認めず、「マルサスの有効需要論」は、上述のように、ケインズのそれとは大きく異なるとする。しかしケインズのマルサス再発見によるその後の「ケインズ経済政策」の貢献は決して一流の時論家では済まされないのではなからうか。